第十一回 松本清張 Matsumoto Seicho

研究奨励事業

研究報告

松本清張の小説の精神世界が中国現代社会に及ぼす影響

南京師範大学 准教授

張　雷

北九州市立

松本清張記念館

松本清張の小説の精神世界が中国現代社会に及ぼす影響

南京師範大学　准教授
張　雷

目次

序章

一　呼応する人物…警官（巡査）　三木謙一　1

二　呼応する人物…主人公　和賀英良こと本浦秀夫　2

三　呼応する人物…主人公　和賀英良こと本浦秀夫　2

四　呼応する人物…主人公　和賀英良とその友人　関川重雄　3

第一章

中国現代社会の時代背景に対する（社会情況、経済発展、思想等の方面から）分析　3

一　物質的欲求における特徴　5

(一)　衣食住、交通の状況　5

(二)　教育状況　6

(三)　就労の状況　7

(四)　現在の物質的状況における特殊心理　8

拝金主義と比較心理

足ることを知りて常に楽しむ――自己満足

中庸と自己欺瞞

懐旧の念を抱き、新奇を好む

二　精神的需要についての態度

(一)　思想　10

(二)　文化と教育　10

(三)　国際化　11

第二章

一般市民の日常生活様式に関するアンケート　12

第三章

中国現代社会における典型的な市民二名へのインタビュー　12

第四章

松本清張の小説の時代と中国現代社会の時代的背景の比較分析　16

第五章

松本清張の小説が描写する精神世界が中国現代社会の人々の思想に及ぼす影響及び人間形成と文化の進歩における積極的意義　17

一　酷似する「時代感覚」　18

二　中国人の困惑、孤独、不安に呼応する清張作品　19

三　清張の現実社会に対する認識と分析について　19

後書き　22

序章

松本清張の小説に描写される時代背景は、一九五〇、六〇代から始まった日本経済の重大な転換期にあたる。経済は安定成長を続け、余力を蓄え、高度成長の足がかりを築いた時期であった。清張の小説は、高度経済成長を前に、新たな日本が形成されていく時期の人々の生活を描写し、現実を掘り下げ、人間性を如実に分析している。従来の推理小説と同様、謎解きの醍醐味に加え、写実性と犯罪動機の分析を重視した社会派推理小説というジャンルを確立した。推理小説として人々を興奮させるだけではなく、社会の不正を暴き、市井に暮らす人々には温かなまなざしを向け、人間性を追究した。

ともに東洋の国である日本と中国には多くの相似点がある。清張の小説における時代感覚は現代中国の時代背景に通ずるものであり、驚くほど酷似した部分を持っている。中国経済も高度成長期を迎え、人々の困惑、焦燥、不安といったものが小説の描写と奇妙に呼応するのだ。本研究では、松本清張の小説の精神世界が中国現代社会及び現代人に及ぼす影響を考察し、現代中国人の思考について比較研究を行いたい。

小説『砂の器』は、一九七〇年代に映画によっていち早く中国に紹介され、観客を震撼させた。砂の器というタイトルは、この小説の主人公和賀英良の人生の運命を象徴している。主人公は必死に努力して、もがき苦しみ、ようやく一時の成功を得たが、最後にはまたもろくて崩れやすい砂の器のように、瞬時の風雨によってバラバラに破壊されてしまった。作品は世人の哀惜と同情を誘い、同時に社会の人々の生態を凝縮して見せた。このように心の奥底に訴えかける作品に対する感動は、中日両国の経済思想、背景が近寄ってきた現在では、中国の読者にとってより深く理解出来ることだろう。『砂の器』には、中国の社会でも熟知されている描写、呼応する描写を多数探し当てることができる。

参照　①松本清張『砂の器』［中］南海出版社　二〇〇七年版
　　②松本清張『砂の器』下巻　新潮文庫　一九七三年

一　呼応する人物…警官（巡査）　三木謙一

①三七六頁　八―一七行の三木警官に対する記述
②四八二頁　三―一二行の三木巡査に対する記述

「（前略）ここに、三木巡査についての性格を申しますと、同巡査は、まことに、立派な警察官でありまして、今でも、同巡査の善行は、同地方で語りぐさとなって伝えられております」

今西刑事は、お茶を一ぱい飲んだ。

「すなわち、同巡査は、村で貧乏の者があれば、わずかな給料でその家の家計を助け、山中に病人が出れば行って肩にかついで山をおり、村のもめごとがあれば仲裁をし、その美談の数々は、私が現地に行って、つぶさに聞いて知ったところであります。同巡査の性質からして、この哀れな本浦父子の処置をした後、幼い秀夫を手もとに保護して、将来、これを適当な他家に養子縁組みさせ、成育させるような心づもりだったと想像されます」

三木巡査に対する記述を通じて、仕事熱心で、社会に対する職責を果たし、仁愛に満ちた人物を見ることが出来る。

二　呼応する人物…主人公　和賀英良こと本浦秀夫

①三七八頁　一〇―一八行の本浦秀夫に対する記述
②四八七頁　一―一〇行の本浦秀夫に対する記述

「さらに、和賀英蔵とキミ子の死亡は、いずれも昭和二十年三月十四日となっておりまして、これは同日に大空襲がございまして、浪速区恵比須町一帯が焼野原となり戸籍原簿を保存しておりました浪速区役所も、法務局も全部、重要書類と共に灰燼に帰したのでございます。そして、このような場合、当人の届出によって、とくに戸籍が作成されることは、法律によって決められております。ここに目を着けたのは秀夫でございまして、つまり和賀英良なる者は最初から存在せず、昭和二十四年に届け出たその戸籍は、全く本浦秀夫の創作でございます。十八歳の彼がそのような知恵をもったというのは、たいそうな早熟であり、天才的ですが、その動機が、自分の将来のため、業病の父の戸籍から脱出したいというところにあったと思えば、同情に値します」

本浦秀夫が戸籍を偽造したことについての記述を通じて、私欲と功名という誘惑のもとで、人々はすでに道徳と恥というアンダーラインを失い、目的を達成するためには苦労を厭わず、手段を選ばないことが見て取れる。

三　呼応する人物…主人公　和賀英良こと本浦秀夫

①三七八頁　二〇―三一行の今西警官の本浦秀夫に対する陳述
②四八七頁　一二―一六行、四八八頁　一―七行　今西警官の本浦秀夫に対する陳述

「島根県を脱出した秀夫は、たぶん、実際に、その幼年期を大阪で過ごしたことと思います。これは私の想像ですが、たぶん、だれかに拾われて、そこで大きくなったと思います。しかし、これは現在、どう調べてもわかりません。たぶん、その一家も、あの戦災で全滅したのではないかと思います。

その後、わかってることは、彼が京都府立××高等学校に行ってることです。これは二年で中退になっていますが、当時、その××市に下宿していたと、彼は学友に洩らしていたそうであります。

その後、東京に出て、その天分である音楽的才能を、芸大の烏丸教授に認められて、ついに今日を成すに至ったのであります。一介の浮浪児から、若くしてわが国作曲界の新しいホープとなった彼は、まことに異常な成功といわねばなりません。彼は、いわゆるヌーボー・グループの中でも特異な存在でありました。また、先ほども申しましたように、某有力政治家の愛娘とも婚約しました……。（後略）」

この陳述から、本浦秀夫は少年時代から努力して、恥を忍んで重責を担い、ひたすら自らの成功を求めたことがわかる。このような人物は中国社会にも数多くいるのだ。

四　呼応する人物…主人公　和賀英良とその友人　関川重雄

①三八〇頁　三―一四行の和賀英良とその友人関川重雄に対する記述

②四九一頁　一―一三行の和賀英良とその友人関川重雄に対する記述

「一方彼の友人に評論家の関川重雄というのがいます。この関川は、そのライバル意識から、心ひそかに和賀に対して不快に思っていたのですが、あるとき自分の愛人である三浦恵美子、これはバーの女ですが、その女が妊娠したので処置に困り、というのは彼女が中絶を拒絶したからですが、その処置を秘かに和賀に頼みました。以下は関川自身の供述でございますから間違いはないと思います。和賀に頼んだ理由は、彼が秘かに電子音楽によって生理状態に異常を与えることが可能であると言ったことを聞いていたからであります。実は、それが超音波のことなんですが、関川は事情を知らず、恵美子の処置に窮して和賀に頼んだのであります。恵美子は何も知らないで和賀のスタジオにはいり、宮田邦郎の場合と同じような結果になりましたが、そのときは、おそらく、和賀には殺意はなく、妊娠中絶が可能であると思ってその方法をとったことと思います。しかるに、それは失敗し、恵美子はスタジオを出るや、ふらふらになって卒倒したそうです。倒れた拍子に渡り廊下の下に転落し、その堅いコンクリートの床に体が当たって、皮肉にも流産状態を起こさせたのであります」

この、和賀英良と友人の関川重雄の関係についての記述は、社会の相互作用を示している。互いに騙しあう友人、邪魔になった恋人の女性、情愛と生命は、軽視と冷淡に変わっていく。

以上に挙げた複数の呼応は、現在の中国社会と松本清張作品の思想における呼応を理解するのに役立つであろう。そこでさらに、中国の時代背景などいくつかの面について論述、分析を進めたいと思う。

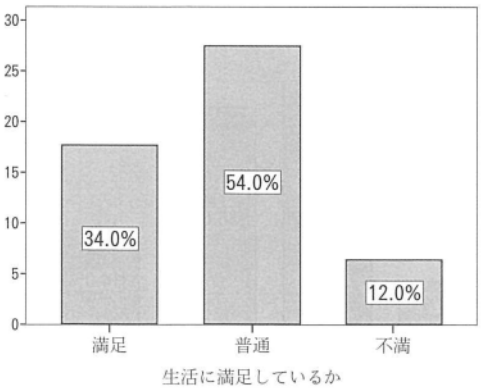
第一章

中国現代社会の時代背景に対する(社会情況、経済発展、思想等の方面からの)分析

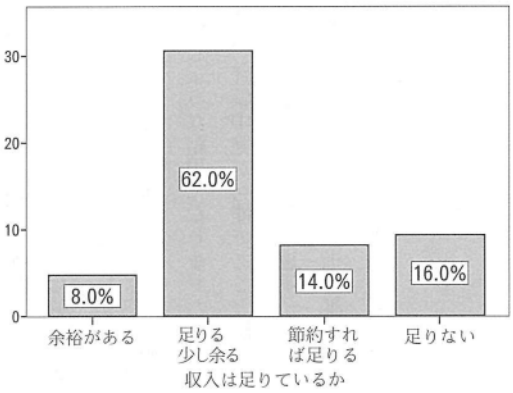
南京市を拠点として、アンケート及び面接調査を行った。

各方面の情況から見て、中国はすでに経済の効率と品質向上のバランスがとれた最良の時期を迎えたといえる。マクロ経済の趨勢は総体的に安定し、成長は持続し、経済効率は顕著に改善されている。

一方で世界的な金融危機によって、国際金融は全局面に渡って再構築を余儀なくされた。中国も今回の金融危機の影響を受けたが、影響は最小限に止まった。ミクロ的に見ると、経済発展と環境汚染の間の矛盾は激化し、経済体制がいまだ整っていな



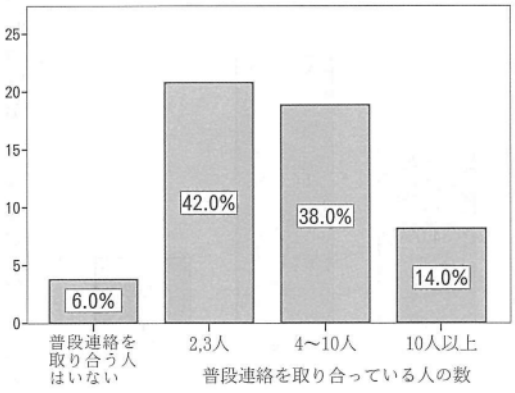
いために各種の社会問題を引き起こしている。インフレが恒常化し、国民の所得格差は年々拡大し、貧富の差が際だっている。調査によると、七〇％の回答者は現在の生活に満足してはいない。「収入は低く、物価は高い」というのが、大方が認める最も重要な社会問題となっている。回答者の一六％は、現在の世帯収入で家族全員が生活していくことは難しいと答えている。



しかしこのような情況であっても、人々は怨嗟の声を上げるわけではない。マクロ経済を冷静に見据え、世帯収入は需要を満たしていると思い、多くの人が「十分に足りている」と考えている。ある回答者は筆者に対し、「金があればたくさん使い、金がなければ使わない」と強調した。しかしこれは当地の人々(南京市民)が、若者から中年まで共通して抱える重苦しい不安を、屈折的に写し出したものだろう。豊かになりたいが、それを自分に強制するよりは、今の境遇に甘んずることをよしとするのである。

中国の不動産価格は急騰し、一般家庭にはなすすべもなく、しかし決して避けて通れない問題となっている。また、就職問題、教育費、社会保障も一部の家庭を悩ませる要因となっている。

皆、多かれ少なかれ、家を買いたいと思い、出来れば良い家を買いたいという願望を持っている。不動産の相場を、遠まきに眺める振りをして、口では不動産の異常な高騰は許せないと不平をこぼしているかも知れないが、自分のために或いは家族のために、ひそかにマイホーム資金を貯めているのだろう。時勢に乗り遅れたくない、他人に負けたくないという気持があるのだ。友人がいつマイホームを買ったのか、マイカー、家具、家電はどこのブランドかなど、すべてが比較の対象となり、会えばその話題となる。

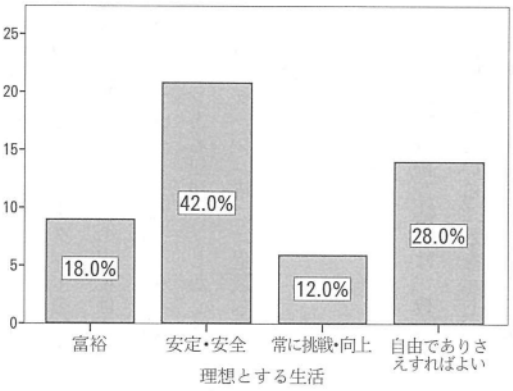


経済の急成長に連れ、人々は物質的幸福を求め、功利主義に走り、浮ついた生活を送るようになった。人間性の道具化が顕著な現象となっている。面接調査の結果統計から、大部分の人々はあくせくと仕事に追われ、ゼンマイ時計の歯車のように働いている。そして急流に落ちた枯れ葉のようにただ流されていくのである。社会に軽薄、不安、無分別が蔓延し、回答者の五〇％が「安定、安全」な生活を渇望している。社会の監督機能が整うに従って、公民の権利意識、主権者意識が強くなり、権利を行使する方法は更に広範になった。社会への参与、関心の度合いも以前より高くなっている。

人と人との関係は、物が不足していた時代の親密さと比べるべくもなく、氷山のように冷たい。回答者の大多数が、心から理解しあっている友人は多くないと答えている。

プログラム化された社会で働き、暮らし、市場経済の競争圧力を受ける。

都市に暮らす人々はこのような環境から解放されて息抜きする機会を強く願っている。「自由さえあれば、どんな境遇にも甘んじていられる」これは回答者の三割が理想とする生活スタイルである。個人の価値が高まり、主観が強くなり、人々はより個人の関心と欲求を重視するようになり、伝統的な規範やルールは弱体化し、「成すべき」責任がやたらと強調される。個性の発展が重視されることはまさに、中国の新時代の思想解放の例証と言えるだろう。



一　物質的欲求における特徴

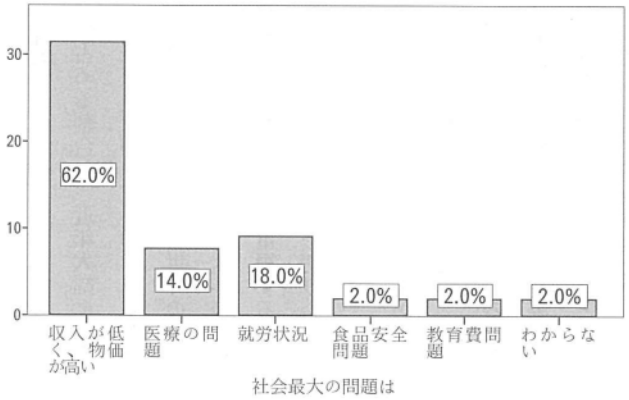
(一)　衣食住、交通の状況

現在の中国は発達しながらも不完全な工業化社会である。南京は六朝の古都であり、生活リズムは速い。歴史と文化が厚く沈積し、使命と傷跡が重くのしかかるこの南京には、過度の浮揚感と退屈感が漂っている。人々はいかに多くの金を儲けるか、どのデパートで服を買って、何平方メールの家を買って、今度はどんな車に買い換えるかなどにばかり気を取られている。現実的な変化と昔からの住民の関係はつかず離れず、曖昧な関係を保っている。しかし南京の新参住民にとってみれば、旧来の古都南京らしさを残すものは修復された城壁くらいのものである。

人々の物質的な面での心理は矛盾している。衣食住と行動は派手さを追求しながらも、現実に甘んじることも厭わず、理性はロマンチックな感情を不足させる。金があればたくさん使い、なければ使わない。衣食は決してこの都市の主要な問題ではないが、貧富の差は日に日に深まっている。

衣服については、購入場所や方法が非常に多く、選択範囲は広い。それぞれの収入レベルに合わせた消費需要を満たすことが出来る。加えてインターネットショップも拡大を続けており、人々の新しい物事の受容能力も高いため、都市生活者にとって、「衣」は最も心配のいらない、満足できる生活必需品となっている。

食事についてはどうだろうか。南京は美食の街であり、隣人から親友まで、繁華街から路地まで、庶民からマスコミまで美食の追求に余念がない。食べものに貴賤はなく、おいしければ尊い。人々の美食に対する欲望が弱まったことは一度としてないが、需要が完全に満たされたことはない。しかし結婚披露宴に限っては贅沢と浪費に拍車をかけている。食事が儀式的に行われる時、食べることに重要な意義が置かれてはいるが、その場合の「食べる」とはもはや単純に食事をすることではない。



自然に変質し、味も変わっていく。これは市場経済という触媒によって引き起こされた変化なのだ。

住宅問題は大多数の庶民にとって、最も悩ましい問題である。不動産相場を静観出来る人は減り、皆が必死で家を求めている。

持ち家がない人は買いたがり、持っている人は子供にも買ってやりたいと思い、もっと良い家に買い換えると思う。不動産価格は急騰を続けるだけで転落せず、バブルの行方は誰にも見通せない。市場の泡の真の姿は人に見破れない。

「交通」の問題はどうだろうか。都市は人口が多く、南京は二〇一〇年には人口八〇〇万人を超えている。交通整備は滞っており、特定日（休前日と休暇明けの出勤日）は交通渋滞が発生する。交通の混乱は人々にいらだちを与え、工業化で汚れた空気が瘴気となり、人々は息苦しさに喘ぐ。

自家用車が氾濫し、車を買える人が多くなり、四輪の自動車を買えない低所得者の人々にとって、環境保護の支援も使命となった。タクシーを捕まえるのは難しく、乗ったところで渋滞に巻き込まれる。地下鉄の出現はすべての市民にとって救世主のように感じられた。地下鉄には渋滞も、長い待ち時間もない。排気ガスも、絶え間ないクラクションとも無縁だ。しかしそんな期待は線香花火のように儚かった。すし詰めのラッシュ時には空気も通らない車両は、まもなく人々の怨嗟の対象となった。

（二）教育状況

中国の都市と農村での、個人の貯蓄目的についての調査結果は、教育費の上昇が続いていることが、彼らの消費傾向に影響していることを示し、子供の教育費は老後の面倒や住宅費を上回って一位となっている。近年の教育費の上昇が人々の貯蓄意識を高めており、消費傾向に影響している。文化教育、娯楽関連商品とサービスへの消費が家計に占める割合は、近年大幅に増えており、とくに教育費用の増加が著しい。現在、中国は一人当たりＧＤＰが三〇〇〇ドルを超えるかどうかの重要な時期を迎えているが、世界の多数の国家が同様の時期を迎えていた頃、文化娯楽関連商品とサービスへの消費比重はむしろ下がっており、教育費用も減少していた。教育を重視するのは中国人の良き伝統であり、一人っ子ということで、さらに生活を切り詰めてでも子供に良い教育を受けさせようする。

それは子供の教育が将来の職業と生活を左右すると考えるからだが、しかし教育費は幼稚園から始まり、賛助費、学校選択費、クラス選択費、大学生の授業料、生活費と、一般家庭が通常負担できるレベルを超えている。そのため家庭では当面の支出を抑え、貯金の割合を強めている。教育資源配分の不均等と、教育戦争が、子女の教育費を吊り上げ、家庭の消費傾向と貯金志向に大きな影響を及ぼしている。社会の発展によって、教育重視の度合いも明らかに高まっている。これは経費のようなものと捉えてよいだろう。親は子供の試験の点数が高くなるように、各段階で命運を分ける試験に勝つように、喜んで大金を投じるのである。教育イコール「試験」となっているのだ。親にとって大切なのは試験の結果だけだ。

現在の情勢を見ると、多くの親が教育の真の意義を理解しつつあり、子供の個性を伸ばすことに目を向け始めている。しかし、すぐに現実の教育体制に直面し、個性を伸ばすか、社会の現状に適応するかの取捨選択を迫られる。これは大きな矛盾であり、このような取捨選択は教育の本質と相反するものだ。教養をものにしたいと考えれば勉強しなければならず、勉強するには名門校、進学校に入学しなければならず、名門校、進学校に入学するには試験

で高い点数を取らなければならない。では、高い点数は一体何を証明することができるのかというと、誰にも答えることができないのである。

面接に応じてくれた人の大半は、今の生活状態に満足しておらず、教育によって現状を変えたいと願っている。中国の家庭では、補助教育の需要が高く、幼児期からの英語教育、小中学校の課外教育、海外留学、ＥＭＢＡ（エグゼクティブＭＢＡ）、職業訓練など五大教育研修市場が拡大を続けている。

現代の中国社会で、教育は社会的地位を変える唯一の手段であり、社会にそびえ立つピラミッドの頂点に向かって上るための梯子なのだ。中国人の教育投資は、子供が幼い時から始まり、一生続けられる。より競争力をつけ、より良い成績を上げるため、学校外での補習は学生にとって当たり前の生活となっている。成績が平凡であれば補習し、優秀であればなおのこと補習に力を入れる。そのため近年は各種の塾や予備校が雨後の筍のごとく増え続けている。文化科目の補習も小学校二年生から高校三年生まで行われている。ある学生は南京の四大高校に数えられる名門校に通い、試験はいつもクラスの上位三位以内に入るが、それでも作文補習班に申し込んでいる。「補習に通わないと不安になるので、周りに合わせて申し込むほかありません。役に立たないかも知れませんが、心はそれで落ち着くのです」これは学生に共通する心理状態を反映した発言だろう。

子供の教育問題は、どの家庭にとっても経済的、心理的重圧となってのしかかっている。

（三）就労の状況

出世の道を探すことは、現在のスピード化されたビジネス社会でもっとも関心を持たれる話題である。能力があっても出世できるとは限らないし、胆力と識見があっても成功を収めることが出来るとは限らない。今の時代、チャンスと偶然に恵まれなければ成功できないのであり、それゆえ足ることを知り、安穏に暮らすことを選ぶのだ。

大方の人は、いまだに公務員は食いはぐれがなくてよいと思っているが、安穏で簡単な仕事に就きたがるのは、必ずしも怠惰で、向上心に欠けるからではなく、争いごとを嫌い、どんな境遇にも甘んじようということだ。産業革命への挑戦、資本の参入、市場経済の融合が目前に迫っている。中国には古来より「既来之、則安之（すでにこれを来せば、すなわちこれを安んず…そこに来た以上はそこに落ち着く）」という言葉があり、人々はこうした変化を歓迎こそしないが拒絶することもない。社会は確実に変革し、面目を一新しようとしているが、大多数の中国人の思想は時代のスピードに追いついていない。「与世無争（世間と争わない）」という中庸思想は元来決して悪いことではないが、市場経済化した中国には明らかにそぐわない、合わないものになってきており、この伝統的観念は激変の時代に分が悪いものとなっている。人々は、自分はそんなに多くのものは望まないと思いつつも、見えざる手に背中を押され、前に向かって急がされる。だから欲は出さないが、待遇が保証され、安定した生活を送れる国家公務員のような食いはぐれのない職業が人々の羨望を集めるのだ。これは統計にも明らかで、二〇一〇年度の江蘇省の公務員試験受験者数は前年に比べ激増している。

この南京では、南方の都市のような熾烈な競争と挑戦はまだ間近に迫ってはいない。親たちは子供が他の子に勝ることを望むが、強制するわけではない。総体的に厳しい就労状況についても、人々の心理は楽観的だと言える。彼らは「起業なんて頭の良い人がすること。自分たちのような凡人は安定した仕事さえ有れば良い」と自らを慰めている。実際は他人をうらやむと同時

に不満も抱いているが、中庸思想というものが顔を出して、不満を吹き飛ばしているのだ。ここでは大きな夢を持つ人がいないかわりに、皆が幸せなのかも知れない。

(四) 現在の物質的状況における特殊心理

拝金主義と比較心理

金銭を追い求めることは、やむにやまれぬことである。世界はますます狭くなり、ますます緊密になり、自分より金がある者が近くにいながら、遠まきに見るほかなければ、羨望や嫉妬から逃れがたい。大昔、或いは遠い将来の「共産主義」の時代にはこんな感情を持つことはないかも知れないが。この拝金は金銭を過度に崇拝しているということではなく、金銭に関する話題に敏感で、熱中するということである。並みの収入しかない庶民にとって、金があるかどうかが人間の第一の評価基準となっている。ことに結婚相手を探すという特別な事情においてはそうである。中国人にとって、他人が金を持っているかどうか遠慮なく追究するのはごく世俗的なことであり、古代社会のような保守的思想であるが、現代になってもこの質問は平然と話題にされ、聞く者も聞かれる者も、この現実的問題を受け入れている。これは新たな時代の自由で開放的な思想がもたらしたものであるが、縁談で家柄の釣り合いを気にする思想と偶然にも一致している。これは前進なのか、それとも復古だろうか。

貨幣の出現は嫉妬や、虚栄や見栄といった心理を生みだす根本的要因となった。現代中国人の生活は、ありとあらゆることが他人との比較、競争の対象となっている。いかなる人間関係、いかなる分野においても競争心理が生まれ、住宅を比べ合い、車を比べ合い、宝石を比べ合い、夫を比べ合う。大人が最も熱を上げるのは子供の比べ合いである。相手の子供がピアノを習えば、自分の子供にはバイオリンを習わせる。相手の子供が囲碁を打てるようになれば、自分の子供には将棋を学ばせる。相手の子供が家庭教師を三人つけて成績を上げれば、自分の子供には更に一人追加する。相手の子供がブランドもののスキンケア用品を使い、ブランドものの服を買えば、自分の子供にも露店の商品を買わせない。こうした競争は、表に出さずお互いの暗黙のうちに行われるものであり、ある程度は相互で切磋琢磨することにつながるかもしれないが、こうした心理の激化は反動をもたらす。特に子供の教育についてはそうである。ある調査によれば、こうした競争心は小学校からすでに小学生から芽生えている。これは、家長という鏡が子供へ反射した結果であることは疑う余地がない。その原因を追求すれば、元来は競争意識が強くなかった都市で、新世代は世代交代の輝かしい一歩をおぼつかない足取りで踏み出し、新時代の挑戦と競争を一つ一つ学んでいるのであり、内心に隠された競争心を次世代に託そうとしているのである。

足ることを知りて常に楽しむ——自己満足

中庸と自己欺瞞

ここ南京で、各年齢層の人々に共通するのは「中庸」という言葉を中核とする伝統的思想である。大きな野心はなく、過度な欲望も必要としない。こうした怠惰な考え方は西欧のロマンチシズム国家に近いように思われるが、相違点は、西欧人の怠惰なロマンチシズムは生活そのものに及ぶことはないということである。家庭を中心に、多くの者が「知足常楽（足ることを知りて常に楽しむ）」という楽観的姿勢を持ち、自分より裕福な人に対して内心

で羨望を感じながら、自分は「これでもう十分だ」と思い直して自分を慰める。こうして人々は自分の精神状態を良好に保ち、様々な問題やプレッシャーに向き合えるのである。現状に満足するという自己欺瞞を会得することは現実に即した最適な生存方法といえる。

しかしこれでは魯迅の小説に出て来る阿Qと変わりない。中国人は根底では「世間と争わない」ことを尊ぶが、こうした考えによって時に物事に無関心で冷淡な態度を取ることもあるし、一方では自らも人をも欺く精神的勝利法を生む。「足ることを知る」の背後には残酷で人には見せられない現実が隠れていることを、心の声がささやくのである。過度の欲望を持たぬことは、進歩を望まないことと見なすことができ、現状に満足することは新しい物事からの逃避でもあり、自分自身を否定し、信用しないことでもあるのだ。

実際のところ、中国の伝統的観念は閉鎖的な自己主義の観念であり、これは本質的には改革開放経済の時代とは相容れないものである。それはいかなる思想よりも個人の内心を中心に置き、いかなる新しい物事にも猜疑と不信を抱く。このため西洋思想と中国の伝統的思想は激しく衝突し、様々な自己矛盾の問題が起こる。現代社会は決して中国思想と西洋思想の完全な融合、疎通や理解を成し遂げたわけではない。中国人は市場経済において様々な選択をするごとに伝統的観念の試練をくぐりぬけているのである。

このため「足ることを知る」観念を楽観的処世術に帰すべきか、それとも進歩を望まない言い訳ととるかについては、見解が分かれるところである。

懐旧の念を抱き、新奇を好む

城壁に囲まれた都市、南京では、母なる河(秦淮河)が街を貫くように流れ、その懐に抱かれて眠るかのような安らぎを与える。方言がさらに人々の親近感を濃厚にする。しかし南京は歴史的使命を持つ都市でもあり、歴史の傷跡はこの街をただの赤子のままではいさせなかった。この街は現実と向き合い、夢幻の安逸と浮薄の圧力の下で徘徊と遊離を繰り返し、絶えず選択を迫られ、自身の価値と意義を求めて模索している。かつての栄華はすでに失われ、この都市は成熟の中で理性的になり、鼻持ちならない傲慢さを身に纏いながらも、歳月の過ぎ去ったことを自覚している。

この街の古きものは、煙霧に覆われており、母なる河の流れに漂うロマンチックな余韻や、早朝の消え去らない靄にも、歴史が沈積してきた古韻の息づかいを感じさせる。この街を包むのは北方の首都のような、冷たく青みがかった赤い光ではなく、もっと穏やかにふりそそぐ、橙色の陽光である。

街の再開発は、中国の都市化の近道とされているようだ。古い民家の取り壊しは人々の追憶を呼び起こす。人々はこの都市の古いものを愛し、不自然なほどに人造的なマンションは好まない。奇をてらった現代的な庭園は、正体も方向性も定まらぬまま、ただ外国人観光客を招き寄せているだけだ。しかし権力者たちはこの街の古きものを護ろうとはしない。南方都市の一つとして、この街には経済発展を果たし、省都として競争力のある工業都市、商業都市となる責務があるからだ。

現代化はこの都市のすべての人から歓迎されている。彼らは懐旧の念を抱くと同時に新しい物事を追いかけ、崇拝し、特別視しながらも、自分では矛盾を感じないのだ。懐旧の念を抱き、新奇を好むことは発揚されることだと理解できるだろう。

南京は、表面は強固で、中身は柔軟な都市である。この平和な姿は人々の会話から直接的に表現されるのではなく、彼らのあらゆる物事に対する認識と受容に表現される。彼らは誰とでも心を通じ合うことができ、北方の中国

人のような豪放磊落な気風を持っている。それはこの街の本質が人々に与えた誇りであり、度量であるかもしれない。

二　精神的需要についての態度

(一)　思想

中国人の道徳観念は、奇妙に整った体系となっている。しかし、この体系は人々の内心にまで概念として定着しているのではなく、人から人へ、代々伝えることによって規範となり、人々の行動を杓子定規的に規制しようとする。人々は何が正しく何が間違っているのかを知ってはいるが、その理由は理解できずやがて反逆の心理が生じる。社会環境の下で生きる人たちが安心を得られず、いっそう不安に踊らされ、方向を見失って戸惑っている。

生きる目標を見失った人々は孤独であり、自分の精神世界に訴える事が出来ず、流れに任せるしかない。孤独に陥って呆然とする人々は、その名状しがたい虚無感がどこから来ているものなのかも分からない。社会全体に回避しがたい浮揚感と焦燥感が漂い、人々の間には共有できる精神的よりどころがない。コンクリートのビルに遮断された人と人との間に、無条件に彼らをつなぐものはあるのだろうか。

現代社会は理性の部分が増えたものの、精神的不安定が顕著になった。感性の力を借りて人々により多くの理性的サポートを与えることは、或いは一種の自己欺瞞、自己肯定の方法であろう。

市場経済がもたらす不安は、庶民の精神的よりどころを失わせた。生活が刻一刻と変化していく中で、慌しく自分の生きる場所と価値を追い求め、競争と挑戦が次第に生活の最重要課題となっていく。経済が急速に発展するにつれ、人々の観念は現実化、物象化し、社会の需要はひたすら物質的な方向に傾斜していく。思想観念の確率は多くの人々にとって生活に必要なものとなりえない。つまり、現代人の思想の発展レベルと社会生活の発展レベルは均衡を得ていないと言える。しかし楽観出来ることは、人々の主観的な判断能力は向上し、社会の公共活動への注目も高まってきた。各種の監督システムも整備され、自己主張の場を得られるようになった。

(二)　文化と教育

世界はますます狭くなり、思想の開化のレベルも、常に新しいものへ入れ替わっていく社会に従って変化していく。様々な文化的観念が浸透し、中国は中華民族の伝統を保持しながら、時代の歩みに沿った変革を行い、世界の中の中国となった。大衆の文化の範疇は拡大し、インターネットのシステムがさらに人々の理解と意志の疎通を促進している。現在の豊かで多元的な文化観念が同質化に向かう中で、より独自性が高く、強烈な主観を持った文化価値体系が作られた。「民族的であることはより世界的である」というマクロ的背景の下、中国人もさらに自己の思想を育てることに関心を持つようになった。

個性化が不可避のものとなったのは当然の成り行きであり、それが主流であったわけでも強制されたわけでも、自主的なマクロ思想に導かれたものでもない。選択肢が多数ある状況では、人々は複雑な選択に拘らなくなるどころか自ら選択肢を作り出すようにさえなる。そして個性化とは、自己に対する自信が強化されていく過程で徐々に形成されていくものである。

現代中国の親たちは、子供の教育において「個性を育てる」ことに躍起となっている。子の成長に気を配り、長所を伸ばすことを重視しているように

見えるが、その実、親が思い描く未来を子供に転嫁しようとしている。このような個性の追求の仕方は、制約するのと同じであり、子どもたちに物心つかないうちから親が作った個性を押しつけ、自分で考えることをさせず、習慣的な依存心を持たせてしまう。子の価値観が両親の価値観と同一であることは、文化伝達の良いパターンといえない。子供が物事をわきまえた大人になってから空間を与えるのではなく、初めから自由に思想をめぐらすことの出来る余地がなければならない。そうでなければ子供は、成人しても自分は何がしたいのか、何が必要なのかわからず、両親への依存心が惰性的に続いていくのである。

事実、このような現象は青年たち、とりわけ高等教育を受けている大学生に広く認められる。直線的な教育モデルは、彼らの親世代に試験、進学、良い学校に入る事、卒業、就職という一本道だけが、光のあたる正道だと思い込ませている。このような教育モデルは文化の育成を脆弱にし、文化を伝えるべき学校が、知識だけ目一杯詰め込んだロボットの大量生産を目的としているようだ。若者は、彼らが今後踏み出す一歩は知っているが、そこからどのくらい歩けるのかはわからない。光の当たる広い道に見えるものは、実は一歩分の幅しかないのだが、皆が皆この丸木橋に押し寄せて渡ろうとすれば、問題が頻繁に発生するのは当然のことである。橋を渡りきって対岸に着いたところで、その先の道はまったく見えない。残念なことに、人生は半分を走り終えただけで、一生分の力を使いきったような気になるものだ。その先はどうするべきか、学歴があってもそれが何になるのか、誰も自分に代わって答えてはくれない。

今日、教育は確かに以前に較べて重視されているが、盲目的な試験主義に傾いている。絶えず可能性を広げることも、現代教育の発展の一つの方向となっている。

（三）国際化

実際のところ、中国人は外国に対して曖昧で矛盾した心理をもっている。現代の中国は、平和で安定していると言えるが、歴史の消せない傷跡は、独特の形で中国人の心に刻まれている。大多数の中国人の愛国意識は強烈であり、外国との和諧（調和…近年の中国のスローガン）の背後には矛盾があり、矛盾はなおも勢いを保ち、影響を及ぼしている。

中国が現代の世界ではまだ「途上国」であり、中国人の心の奥底には外国の物資と文化への羨望と嫉妬がある。中国人独特の西洋崇拝はこのような曖昧な心理によるものである。改革開放以降、西側経済が堂々と中国市場に進出し、合弁という形式で中国市場のうわべだけを変えさせたが、中国人は中国市場をまったく信頼せず、外国ブランド信仰をより強くした。その原因は、西側市場経済の成熟ぶりに帰結することができよう。西側経済は、市場経験を生かした経営で中国市場でのシェアを拡大していった。当時経営能力がゼロに等しかった国内の企業家たちは、自社ブランドひいては製品そのものまで恭しく譲渡してしまい、民族系企業を不利な立場に追い込むことになった。

中国人は海外ブランド品を好むが、その価値観がなぜ生じたのかはまったく意識していない。若者の中には、ブランド品がプライドを満たすため、更には誇示するためのツールになっている者もいる。筆者の見るところ、外国製品信仰はすでに飽和状態に達し、民族ブランドを保護しようという動きも出始めている。実務主義も中国の実力が高まるにつれて広がりつつあり、中国人の「西洋崇拝」は、冷静さを取り戻しつつあると言えるだろう。

第二章

一般市民の日常生活様式に関するアンケート

「日常生活満足度調査」

こんにちは。私たちは南京生活調査分析チームです。現在、一般市民の家庭生活について調査しており、データは学術研究にのみ供します。回答に要する時間は約三分間です。ご協力ありがとうございます。

① 現在の家庭や生活環境に満足していますか。
A…満足　B…普通　C…不満

② 現在の世帯収入は家族の日常生活の需要に足りますか。
A…余裕がある　B…足りる。少し余る
C…倹約すれば足りる　D…足りない

③ 中国の社会発展にとって最大の問題点は何だと思いますか。
A…収入が低く、物価が高い　B…治安の問題
C…医療の問題（医療を受けられない、医療費が高い）
D…就労問題　E…食品安全問題
F…教育費の問題　G…分からない

④ 現在の自分の家庭の問題点は何ですか。（複数選択可）
A…住宅　B…年金、社会保障　C…ローン
D…就労問題　E…子供の教育の問題　F…その他

⑤ 余暇に楽しんでいることは何ですか。（複数選択可）
A…テレビ　B…インターネット　C…読書
D…ショッピング　E…友人と会う　F…娯楽施設
G…散歩

⑥ 自分自身及び子供の仕事についてどう考えますか。
A…不満　B…どちらでもない　C…基本的に満足

⑦ 現在の学校についてどう考えますか。
A…必要だが、現在の受験教育制度は改革が必要。
B…必要。学校での学習は将来良い仕事に就き、良い生活をするための基礎である。
C…不必要。個人の趣味が最も重要であり、学校での学習が必要とは限らない。
D…特に意見はない。

⑧ あなたの理想の生活とは何ですか。
A…富裕　B…安定、安全　C…常に挑戦、向上
D…自由でありさえすればよい

⑨ いつも連絡している友人は何人ですか。
A…いつも連絡する友人はいない　B…二～三人
C…四～一〇人　D…一〇人以上

⑩ 社会人にとって最も重要なことは何だと思いますか。
A…事業　B…財産　C…感情　D…夢　E…道徳

⑪ あなたについて教えてください。
年齢　性別

第三章

中国現代社会における典型的な市民二名へのインタビュー

一　対象者…林さん、男性、一九八五年生まれ、南京某大学学生

□インタビュー内容

筆者…現在の生活環境について、学習環境は希望通りですか。満足していますか。

林　…全体的には満足しています。まず、生活条件は子供のころに比べ大きく改善され、無から有へと変わりました。以前はマンションに住めるなんて考えていませんでしたし、今のように自分の部屋を持てるとは考えていませんでした。近所の人とは以前ほど親密な付き合いはありませんが、人間関係は良いです。しかし不愉快なこともあります。身近な友人の携帯電話が盗まれたといったことはよく聞きます。

学習環境については満足していません。学校はハード面の整備が不充分ですし、まだ不公平な問題が多いです。

筆者…そうですね。これはずっと以前から潜んでいる問題ですね。これは解決可能な問題だと思いますか。

林　…できると思います。しかし怨むだけで行動しなければ、真実の声は伝わりません。

筆者…国内外の事に関心がありますか。興味のあるニュースや話題について教えてください。

林　…コペンハーゲンで行われる気候変動枠組条約締約国会議（ＣＯＰ15）と上海万国博覧会について注目しています。私たちは環境保護について共通の認識を持つようになりました。私の周囲の人たちは皆、環境保護を意識しており、乾電池の回収、水の再利用、ポリ袋を使わない等を習慣にしています。ＣＯＰ15で世界中の人が満足できる答えが出ることを期待しています。

筆者…確かにそうですね。現在、自分には社会人としてどのような責任があると思いますか。大きなことでなくてもかまいません。

林　…責任と言えば、働いてお金を稼ぐことと、父母を敬うことです。しかし私自身にとって、夢を実現することが最も大切です。

筆者…あなたの夢は何ですか。

林　…自分のやりたいことをやり、しかるべき社会的地位を得ることです。

筆者…先ほどあなたは両親を敬い、責任を果たすことについて触れましたが、あなたにとっての両親の価値と意義は何ですか。

林　…我が家は民主的な家庭で、私は両親とたいへん仲がよいです。私にとって母は何物にも代えられない存在であり、私人としてどうあるべきか教えてくれました。父は大きな視点で家族全体のことを考えていますが、母はなにかにつけ私のことを気遣ってくれます。厳しい父と優しい母という典型的な家庭環境は、とても恵まれていると思っています。父母のことはずっと誇りに思っています。

筆者…なるほど。ほんとうに幸せそうな御家庭ですね。一家の円満は何よりすばらしいことだと思います。卒業を間近に控えた大学生として、現在の住宅難や就職難といった社会問題について、危機感はありますか。あるいはすでに自分の進路を明確にし、対応策を見つけましたか。

林　…はい。自分の目標はすでにはっきりしています。留学することです。ですから住宅難についてはあまり感じませんが、就職難の問題は国内にいても留学しても頭の痛い問題です。今はまだ、どのように対応したらよいかわかりません。

筆者…現在、大学生から高校生まで留学ブームが起きていますが、これは、それぞれの人生にとって理性的な判断であり、選択であると思いますか。それとも、就職などの問題から逃避して別の道を探すためですか。あるいは、ただ流行を追いかけたものですか。

林　…二タイプに分かれると思います。第一に、ほんとうに留学して知識を身につけたい人、第二に、ただなんとなく海外に出たいという人です。前者は、自分が決めたことを理性的に捉えていると思います。後者は就職難などから逃げようとしているか、ただ流行を追いかけているだけだと思います。

筆者…現在、あなたの気持ちや状態に影響するような問題はありますか。

林　…うーん…やはり留学試験のことがたいへん気にかかっています。これを目標にしていますから、失敗したらどうしようと思っています。

筆者…自分の価値をどの分野で生かすことに意義があると思いますか。あるいは、どのような形で自分の価値を実現し、満足感と達成感を得ていますか。

林　…誰かを助けることができた時に満足感や達成感を感じます。また、自分の目標を実現した時が、最も満足感を得られる時だと思います。

筆者…あなたにとって、「理想」はどんな意味がありますか。

林　…私のような「八〇後」(八〇年代生まれ)は、理想主義的すぎるところがあります。理想は原動力になりますが、時には理想化しすぎて、他人から見れば滑稽に感じられるでしょう。時には理想があるゆえに自信を失うこともありますが、また一方では理想に励まされて前進することもあり、矛盾が存在していると思います。

筆者…あなたが理想とする生活はどういう生活ですか。詳しく教えてください。

林　…私は少し完璧主義かもしれません。第一に、幸福で、家族が健康であること。第二に、自己実現をして、十分な達成感を得ること。第三に、楽しく生活することです。

二　対象者…呉さん、男性、一九五二年生まれ。南京某社社長

□インタビュー内容

筆者…今の生活に満足していますか。どのような問題を感じていますか。

呉　…改革開放以来、特に「三つの代表」思想が打ち出されて以来、生活は多様多彩になり、もちろん生活レベルはおおいに向上しました。しかし、好ましくないこともあります。現在、住宅問題は深刻化しており、政府

は困窮者の援助をして問題解決をはかろうとしていますが、徹底されていません。また、物価の上昇に収入の増加が追いついていません。

筆者…中年世代として、上の世代と下の世代に挟まれ、プレッシャーは大きいのではありませんか。

呉　…中国は礼節の国であり、忠孝の国です。お年寄りを敬い、子供を大切にする伝統があります。上の世代と下の世代に挟まれ、私たちの世代が苦しい時期であることは確かです。生活に生じている様々な矛盾を解決する、仲介的役割を果たさなければなりません。

筆者…あなたの御家庭では、世代間の対立のような問題はありますか。

呉　…中年世代が老人と若者の両世代の仲介役となり、上下の世代の緩衝材となる覚悟をしていれば、世代間の対立はありえません。

筆者…それでは、あなたの御家庭では、現在どのような問題がありますか。

呉　…夫婦の収入は以前に比べれば多少の余裕があるものの、実際の生活は楽ではありません。家庭には貯蓄が必要です。若い時のようにあればあるだけ使うようなことは出来ません。

筆者…この問題のほか、どのような問題点がありますか。教育問題はいかがですか。

呉　…教育の問題は確かに大きいです。子供の教育については、親がまず手本を示さなければなりません。学校に、自分の子供の育て方を強制することはできません。また、子供を親の考えに無理矢理従わせることも出来ません。子供たち自身の考えを尊重してやりたいと考えています。

筆者…あなたはお子さんについて、あなたが期待していた目標に達したと思いますか。

呉　…私は子供に満足しています。娘は私たちが考えていた目標を超えました。

筆者…そうなった要因は、どのようなものだとお考えですか。あなたの影響は大きいですか。

呉　…一人の人間が有用な人材になるにはまず本人の自覚が必要で、理想を持たなければなりません。さらにその理想のために自発的に努力しなければなりません。そうなるように子供を導いたつもりですが、決して無理強いはしませんでした。

筆者…あなたが子供のころの学習生活もそうでしたか。現在との最大の違いは何ですか。

呉　…私たち五〇年代生まれは時代の影響を受けました。教育費は低かったものの、この時代の学問は時流に流されたもので、皆が学べば自分も学ぶというものでした。その後、文化大革命が起き、勉強しようにもその機会がなくなりました。〇点の者から一〇〇点の者まで揃って農村に下放され、勉強は二の次にさせられました。現在の社会とは全く違うのです。

筆者…それでは総体的には、現在の教育情勢は良いと考えていらっしゃるの

でしょうか。

呉　…手放しでほめられるものではありません。学業を収めて立派な人材になれる人はごくわずかです。情熱に溢れ、事業を興したいという若者もごくわずかです。受験優先の教育が子供たちの情熱や夢をすり減らしているのです。

筆者…人生にとって理想とはどのような意義があると思いますか。あなたのこれまでの理想と、現在の理想についてお聞かせ下さい。

呉　…現在の私にとって理想とは空虚な言葉で、ただ思っているにすぎません。現実に直面すると、理想などつまらないものに見えてしまうのです。年齢とともに心境が変わり、五〇歳を迎えるにいたってすっかりこのような考え方をするようになってしまいました。今は特に理想と呼べるようなものはありませんが、ただ家庭を大切にし、家族がつつがなく暮らせるよう願っています。

筆者…なにか後悔していることはありますか。

呉　…もちろん、後悔していることは多いのですが、何の意味もありません。ただただ、今の仕事と生活を大切にしたいと思っています。

筆者…若者についてどう思いますか。

呉　…社会競争が熾烈になっていますが、一部の若者には向上心がなく、困難にぶつかるとすぐにあきらめてしまいます。生活や仕事で労せずして成功したいという考えがあり、責任感に欠けているのです。そして両親に依存しています。もちろん、一部の青年に過ぎないと思いますが。

第四章　松本清張の小説の時代と中国現代社会の時代的背景の比較分析

経済成長という背景の比較分析

松本清張の小説に描写される時代背景は、一九五〇、六〇代から始まった日本経済の重大な転換期にあたる。経済は安定した成長を続け、余力を蓄え、高度成長の足がかりを築いた時期であった。日本は第二次世界大戦の敗戦で廃墟と化し、戦後初期には状況は一層悪化した。経済は崩壊し、失業率は極めて高く、日本史上まれにみる生みの苦しみの時代であった。しかし一連の政治、経済改革を行った結果、一九五六年頃から急成長に転じた。一九六〇年にはすでに一人当たりＧＤＰがアジア最高値となった。日本経済は一九五六年から一九七三年まで高度成長を続け、この時期に日本はアメリカに次いで世界第二の経済大国になり、アジアの新たな巨人となり、世界の経済界から注目を集め、「世界経済の奇跡」と呼ばれた。当時の日本の都市化水準を見ると、一九五〇年の都市人口が総人口に占める比率は三八％で、今日の中国とおおむね同じである。

一九五五年から、日本は重化学工業を中心とする産業構造に転じ、資本・技術集約型経済に移行していった。産業構造から見ると、現在の中国の経済成長は日本の四十年前の水準に相当する。今日の中国の経済成長は松本清張の小説で描かれた時代の経済成長と酷似しており、経済は安定成長から高度成長となっている。

二〇一〇年始めに発表された統計データによれば、中国の外貨準備高は世

界第一位で、ＧＤＰは第三位、輸出高は第二位に躍進した。消費構造の高度化が産業構造も高度化させ、工業化が加速し、経済の急成長を招いた。戸籍制限が緩和され、人口流動が加速し、都市化が急速に進行したことが更に経済成長に拍車をかけた。そして国際化の進行が、中国の経済発展を促進したのである。二十一世紀に入り、経済の総量が大幅に増加したことに加え、高度成長が続き、デフレの幅は減り調和の取れた発展へ向かっていった。

人々の仕事と生活、思考についての比較分析

日本が戦後わずか二十年間で世界有数の経済大国に発展したことは争う余地のない事実であり、いかにしてこの局面が形成されたかはその民族性と不可分だろう。日本の勤勉、意志が強い、楽観的、厳格、規律を守るといった民族性が、日本経済の奇跡を成し遂げた、のである。とりわけ、戦後の数年間、日本人は廃墟同然の地に暮らしながらも、運命を怨むことなく、なお勤勉に働き、前向きに生活し、次世代の教育に力を入れた。現在の中国経済の急発展も、やはり人々の勤勉さ、忍耐、苦しみ、苦労、努力、向上心と切り離すことは出来ない。しかし労働の高度化、重労働化と激しい競争の下、人々は抑圧、憂鬱、困惑、焦燥、不安といった感情から逃れられず、功を焦り、成功を急ぎ、騙し合い、名利を追求するといった現象が生じている。これらはすべて経済成長の副産物であり、経済の飛躍的発展がもたらした陣痛である。

相似性を持った経済成長の環境にあって、人々の思考モデルと意識にも相似的な変化が生じている。

第五章

松本清張の小説が描写する精神世界が中国現代社会の人々の思想に及ぼす影響及び人間形成と文化の進歩における積極的意義

松本清張の小説に描写される時代背景は、一九五〇代の日本であり、経済の重大な転換期にあたる。経済は安定した成長を続け、余力を蓄え、高度成長の足がかりを築いた時期であった。清張の小説は、高度経済成長を前に、新たな日本が形成されていく時期の人々の生活を描写し、現実を掘り下げ、人間性を如実に分析している。従来の推理小説と同様、謎解きの醍醐味に加え、写実性と犯罪動機の分析を重視した社会派推理小説というジャンルを確立した。推理小説として人々を興奮させるだけではなく、社会の不正を暴き、市井に暮らす人々には温かなまなざしを向け、人間性を追究した。人々に共通する不安を描き、強烈な現実批判主義の精神に満ちている。

中国と日本は同じ東洋の国であり、歴史・文化の発展において密接な関係があり、問題をとらえる視点や思考の仕方も共通する部分が多い。相似的な経済成長の背景が、似通った思想空間を形成した。経済成長、社会の進歩、歴史の変遷、都市の変化は、人々に似通った思想の変化と共鳴をもたらし、時代を超えて、精神と思想を結合させた。

清張の小説における時代感覚は現代中国の時代背景に通ずるものであり、驚くほど酷似した部分を持っている。中国経済も高度成長期を迎え、世界的な地位と影響力を増大させているが、人々の思想と意識の発展は時として経済に同調せず、時に遊離している。人々の困惑、動揺、不安は清張作品の人

物描写と奇妙に呼応しており、中国の発展の現状と照らし合わせて再読してみると、強烈な共鳴を呼び起こす。現実社会についてはっきりとした認識と分析があってこそ、このような深い作品が生まれるのであり、また現実社会について冷静な認識と分析を行ってこそ、清張作品の真髄を理解することができるのである。改めて清張作品を読み返してみて、筆者を惹きつけるのは複雑なプロットや、難解なトリックではなく、作品中に溢れる情緒と人間愛であり、これは現代中国人の思考や需要と、はからずも一致しているのかもしれない。

一　酷似する「時代感覚」

松本清張が小説を創作した時代と、現代中国社会は、どちらも高度経済成長を時代背景とし、清張の小説の時代感覚は現代中国と酷似したところがある。この相似観と既視感は清張の小説でおしなべて感じられる感覚であり、筆者の読んだ作品すべてにあふれているものであった。

このような「時代感覚」は、具体的にどの作品に表現されているか。現代中国と酷似している部分とは具体的に中国社会のどの部分を指すか。以下に例を挙げたい。

例　①松本清張『黒革の手帖』［中］新世界出版社　二〇〇八年版
　　②松本清張『黒革の手帖』上巻　新潮文庫　一九八三年

①　五六頁　五―一三行の銀座のバーの女、波子についての記述
②　一三八頁　六―一三行の銀座のバーの女、波子についての記述

「波子の店の開店が近づき、院長はその準備の相談に乗ってやっているはずだ。もちろんその状況に応じて彼は金を出しているので、いきおい熱心にならざるをえまい。

波子も図々しい女で、カルネと同じビルの仲にある店を買って入る。二階上だ。普通の神経ではない。遠慮も仁義もないというよりは挑戦的な態度であった。買い取った「ボウゼ」という店は、カルネよりも三坪ほど広い。権利金をずいぶん出したはずだ。居ぬきとはいっても、前の店の面影がないくらいに大改造するらしく、すでに、大勢の大工が入っている。院長の金だから波子は思いのままに使える。

この前、カルネを退める「お願い」と、開店の「あいさつ」を兼ねて、駒場のアパートに現れたときの波子は、新調のミンクのコートをきていた。品がいいから五百万円以下ではなかろう。指には二キャラットくらいのダイヤを燦めかせていた。あれだって八百万円はするだろう。その二つだけでも、院長は千三百万円を彼女に費っている。それに洋服だの和服だのを波子は何枚彼につくらせているかわからない」

現代中国社会の経済発展の下で、この種の現象も出現している。男女の愛が金銭欲と交錯し合い、成功を渇望し、女は成功した男の欲望と引き替えに、自分の仕事――自分の店をオープンし、夢を実現する。道徳と恥を知る心を捨ててしまった彼らは、ただ人間の赤裸々な金銭と欲望の追求に走るのである。

二　中国人の困惑、孤独、不安に呼応する清張作品の人物描写

高度経済成長の中で、都市に住む中国人は、焦燥感、孤独感につきまとわれ、しばしば特定の行為によって気を紛らわすようになった。それは現代社会の人と人のつながりの希薄さ、不安を体現していた。具体的にどの作品の、どの人物の描写に呼応するか例を挙げる。

例　①松本清張『点と線』［中］南海出版社　二〇〇七年版
　　②松本清張『点と線』　新潮文庫　一九七一年

呼応する人物…安田の妻安田亮子

①八六頁　七―一四行の安田の妻、安田亮子が雑誌に掲載した随筆における自分自身についての記述

②一三〇頁　九―一七行、一三一頁一行、安田の妻、安田亮子が雑誌に掲載した随筆における自分自身についての記述

「私がこうして床の上に自分の細い指を見ている一瞬の間に、全国のさまざまな土地で、汽車がいっせいに停まっている。そこにはたいそうな人が、それぞれの人生を追って降りたり乗ったりしている。私は目を閉じて、その情景を想像する。そのようなことから、この時刻には、各線のどの駅で汽車がすれ違っているかということまで発見するのだ。たいへんに愉しい。汽車の交差は時間的に必然だが、乗っている人びとの空間の行動の交差は偶然である。私は、今の瞬間に、展がっているさまざまな土地の、行きずりの人生をはてしなく空想することができる。他人の想像力でつくった小説よりも、自分のこの空想に、ずっと興味があった。孤独な、夢の浮遊する楽しさである。

仮名のない文字と、数字の充満した時刻表は、このごろの私の、ちょっとした愛読書になっている。」

この安田亮子の自身についての描写は、亮子の寂寥と孤独を如実に反映しており、ただ列車の時刻表と人びとの交流に思いを馳せることで心中の寂寥を紛らわせているのである。

三　清張の現実社会に対する認識と分析について

清張は現実社会に対する冷静な認識と正確な分析、把握を行えたからこそ、このように多くの真実と、生き生きとした人物像を描くことが出来た。作品中の人物をまるで自分の身近に実在する人物のように感じ、自分もその中に身をおいて、作品に入り込むことが出来た。どの作品の中で、清張の現実社会に対する冷静な認識と分析を感じられるか。

例　①松本清張『ゼロの焦点』［中］南海出版社　二〇〇七年版
　　②松本清張『ゼロの焦点』　新潮文庫　一九七一年

板根禎子の描写に見られる呼応と体現

①一四九頁　二二―二八行、一五〇頁一―八行、板根禎子についての記述

②　一二頁　一―一二行、板根禎子についての記述

「縁談が決まってから、挙式までの期間が少なかったせいか、禎子は鵜原憲一と二人きりで会って歩く日は一度もなかった。もっとも、それわしようにも、鵜原はたいてい金沢の方に行っていて、東京にはいなかった。禎子は、結婚前の交際ということに以前ほどの憧憬は持っていなかったし、鵜原からも希望がなかった。禎子は、見合いの席で瞥見した鵜原憲一に満足していた。

それは積極的に好きになった、という感情には距離があった。第一、鵜原憲一について禎子に分からないところがたくさんあった。こういうところに勤めていて、こんな仕事をしていて、兄夫婦と同じ家にいた――そのこと以外になんにも分かっていないのだ。だが、そういう概念だけで、なんとなく鵜原憲一が理解できそうであった。単に鵜原だけではない、結婚する相手というものは、ぞんがいそんな茫漠とした理解のもとに結ばれるのではなかろうか。女は、相手のその未知におそれと、魅惑を感じるのだ。そうして結婚した後は、未知の部分はしだいに正体が知れてきて、恐怖は去り、魅惑は平凡化してしまうのであろう。」

板根禎子という人物についての描写を読むと、すぐに彼女の心理状態を理解できる。冷静で、口数が少なくて、意思の疎通と理解が不足している。現代中国社会にも明確に現れていることだ。人と人の距離感が広がり、心の扉を開けることは一種の贅沢である。夫婦の間で壁があり、見合いからすべてマニュアル化されてしまい、速成ゆえに情緒がない。

四　清張作品の魅力

改めて作品を読み直すと、清張作品の魅力は、事件の謎解きではなく、作品中の人物のふれあいにあるということに気づく。具体的に、人と人のふれあいについて描写された部分をいくつか引用する。

例　①松本清張『点と線』〔中〕南海出版社　二〇〇七年版
　　②松本清張『点と線』新潮文庫　一九七一年

警視庁の三原紀一と福岡警察署の鳥飼重太郎の両人の手紙のやりとりの描写から、人と人の真心は永遠に続くようすを見ることが出来、行間には人びとのふれあいと助け合いが投射されている。同時にこの二人の仕事に対する執念、まじめさ、事件解決をあきらめない姿勢に、人間性を重視していることが見て取れる。

①一一七頁　一―一一行
②一七七頁　一三行、一七八頁一―一四行

「鳥飼重太郎から三原紀一へあてた手紙

三原警部補殿…

鳥飼重太郎拝

長い間、御無沙汰いたしました。初めて博多でお目にかかって以来、三ヶ月たちましたが、生来の筆無精のため失礼いたしております。今回、思いがけなく長文の御芳簡をいただき、まことにありがとうございました。小生の失礼をおわび申しあげるとともに、御芳情を厚く御礼申し上げます。

早いもので、はじめてお目にかかったときは、まだ玄界灘の寒風が吹く早

春でしたが、ただいまではもう五月の半ば、陽ざしの中を歩くと汗ばんでまいります。当地名物のどんたく祭は、この月のはじめに例年のごとくにぎやかにおこなわれましたが、これが過ぎると当地では夏の来る前ぶれとなります。ついでながら、お暇のときはぜひ一度、博多どんたくを御見物においでくださるようおすすめ申しあげます。

とはいえ、御芳書によりますと、あいかわらず困難な事件と四つになってお取り組みの御様子、小生老来の怠惰を慚愧するとともに、御精励の御活動にたいして羨望の念を禁じえません。小生今少し若かりせばと田舎住みの老体の身をかえりみて、いささか憮然としております。いや、これはとんだ繰り言を申し上げました。」

①一二九頁　一―一二行

②一九八頁　二―一二行、一九九頁一―四行

「三原紀一から鳥飼重太郎へあてた手紙

鳥飼重太郎様…

ずいぶん、暑くなりました。炎天の下を歩くと靴がアスファルトにのめりこみそうです。勤務から家に帰ってくると、真裸になって行水し、井戸水で冷やしたビールが楽しみです。いつぞや、あなたに連れられて、香椎の海岸に吹きさらされてふるえた、玄界灘の寒風が恋しいくらいです。

このような落ち着いた気持ちで手紙を書くのは久しぶりです。あなたにはじめて博多でお目にかかったのは今年の一月でした。香椎の海岸で、玄界灘の吹きさらしの風にふるえながら、あなたのお話を聞いてから、七ヵ月経ちます。経ってみると早いものですが、捜査に心を迫われて一日としてしずかにやすむ余裕がありませんでした。今日は、初秋の陽ざしのように心がおだやかです。事件がおわったせいでしょう。困難な事件のあとほど、この憩いの気持は格別です。いや、これは先輩のあなたに申しあげるのは釈迦に説法でした。だが、この充実した気持は、事件についてあなたに手紙を書かねばならぬ衝動となりました。それはあなたにたいする私の義務でもあります。そして私の喜びです。

いつぞや、安田辰郎の北海道行きが一番のなやみだとあなたに手紙をさしあげましたね。それにたいしてご親切なご返事をいただき、激励してくださいました。ありがとうございました。どんなに元気づけられたかわかりません。」

筆者は松本清張の精神世界と現代中国人の思想を考察し、日中両国の人間性分析の対話プラットフォームを構築し、清張の小説が現代中国人の思想に及ぼす影響について模索した。作品に現れる社会的責任や人間性に対する強烈な追究は、世人の注目を集める一里塚となっている。世を嘆き、孤独を悲しむことが清張作品の真の意図ではない。反省と進歩こそが人類の発展の本質なのである。

松本清張は生誕百年を迎え、世界は一つの共同体になろうとしている。清張作品は世界文化の宝庫で永遠の輝きを放ち、時代も国境も越え、いついかなる時でも、人間性の煌めきを放ち、人類の文明の進歩を励まし、前進させるだろう。

二〇一〇年五月三日

後書き

この研究の機会を与えてくださった松本清張記念館、北九州市教育委員会に心から御礼を申し上げたい。とりわけ、中川里志氏には大変お世話になった。

本研究では、親友である田子琪氏に並々ならぬ助力と協力を頂いた。氏の助けがなければ、この研究は実現できなかった。心から感謝したい。

また、本研究の一環であるデジタル映像の制作では、丁蕾准教授、リサーチに関しては胡玉波さんにそれぞれお世話になった。合わせて感謝申し上げたい。

平成二十三年一月三十一日発行

第十一回松本清張研究奨励事業研究報告書

編集・発行　北九州市立松本清張記念館
北九州市小倉北区城内二番三号
電話　〇九三―五八二―二七六一

印刷・製本　㈲プラネット印刷

松本清張研究奨励事業

第14回

募　集　要　項

一、趣　旨　時代を見つめ続けた松本清張の文学を研究することは、今後の時代の進むべき方向性と私たちの生きていく指針を見出すことにもつながります。このような視点から、清張の作品や人物像についての研究活動を推進し、歴史や社会の事象の深層を追求する精神を継承していくため、松本清張夫人ナヲ様のご厚意により創設しました。

二、対　象　ジャンルを問わず、松本清張の作品や人物像を研究する活動や、松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動（調査、研究等）で、これから行おうとするもの。年齢、性別、国籍は問いません。ただし、未発表に限ります。個人または団体も可。

三、内　容　入選者（団体）に二〇〇万円を上限とする研究奨励金を支給します。金額は企画内容を検討して決定します。

四、応募規定　今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容が具体的にわかる企画書、予算書、参考資料など（様式は自由、ただし日本語）を、平成二十四年三月三十一日までに応募してください。

五、選　考　松本清張記念館内の選考委員会により選考します。

六、発　表　審査終了後、審査結果を直接通知します（六月末頃）。なお、入選者には開館記念日（八月四日）に、北九州市で贈呈式を行います。

七、その他　採用された企画は翌年の六月末日までに実施成果を報告していただきます。また、成果品である研究論文、報告書等は記念館が刊行予定の研究誌に掲載することがあります。成果品にかかる著作権等諸権利は、北九州市に帰属します。

八、応募先　〒八〇三―〇八一三　北九州市小倉北区城内二番三号
TEL〇九三（五八二）二七六一　FAX〇九三（五六二）二三〇三

北九州市立　松本清張記念館